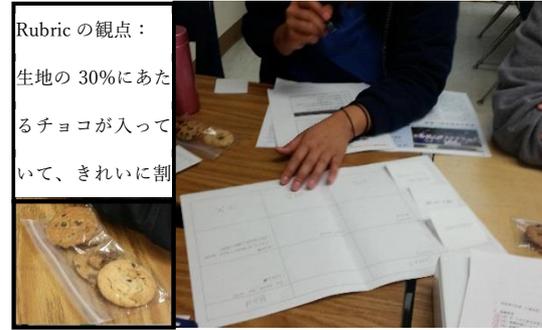


評価

(1) ルーブリック作成 (添付資料 3)

米国では 1980 年代よりルーブリックが普及したため、本校の米国教員はルーブリックを頻繁に活用してきたが、日本から赴任している教員の中には活用したことがないものも多かった。そこで、ルーブリック作成研修を行い本研究で使用することができる 4 事例を共有した。



美味しいチョコチップのルーブリック作成

図書館司書を配置できない本校では、児童生徒が多様な読書方法を自主的に選んでいくように支援するルーブリックは有効と思われ、多くの教員がルーブリックを作成していくことで、読書を推進する教育手法を取り入れた研究目標(6)の推進をはかる。また、「図書館を活用した日本文化の発信」という研究目標の共通理解をはかるためにも、ルーブリックを活用していく。

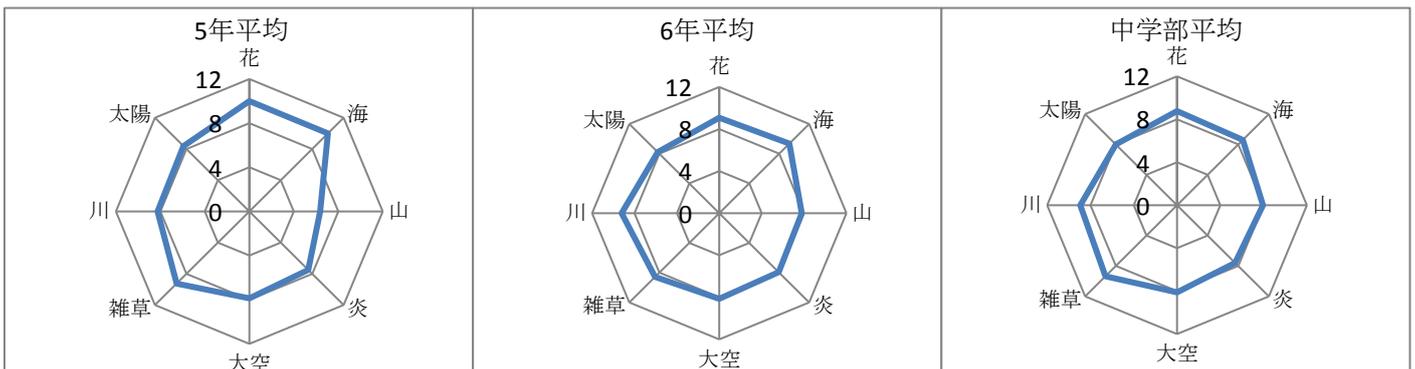
(2) グローバル人材の資質・能力・スキルを自己評価するツール (添付資料 4)

本校では、グローバルリーダーに必要な資質を図 5 のように提示している。そこで、各分科会で育成したい力を、この 8 つの資質ごとに分類し、自己評価するツールを作成した。研究開始の 2018 年 2 月、1 学期末である 2018 年 7 月、研究終了時の 2019 年 2 月の 3 回にわたり、5~9 年生を対象にアンケートを実施し、各回ごとにブルームの目標分類にそって 3 段階に質問を引き上げ、思考力の育成を図っていく。

下記は日系人の歴史を学習する際に関わる、8 つの人格に対する意識調査で、学年ごとに各値を平均で表した結果である。



グラフ 3：日系人の歴史学習における 8 つの人格



グラフ 3 の考察：

① 5 年~中学部

児童生徒の結果を個別にみると、8 つの領域意識は多様となっているが、平均値からわかるように、米国に滞在している体験から「世界のどこでも生き抜く(雑草)」「異文化を受け入れる(海)」という意識は比較的高い。また、日本の教育を基盤としている本校の特徴でもある「謙虚に澄んだ心をもつ(川)」という意識も育成されていることがわかる。一方、5 年生に関しては、カリフォルニア州の歴史文化の基盤となっている日系人について学習を開始してい

ないことから、「知識と教養を積み上げる(山)」の値が小さく、問題解決型学習を扱う機会が少ない現状から、どの学年においても「問題解決につき進む(炎)」意識や体験は、あまり高くなっていない。

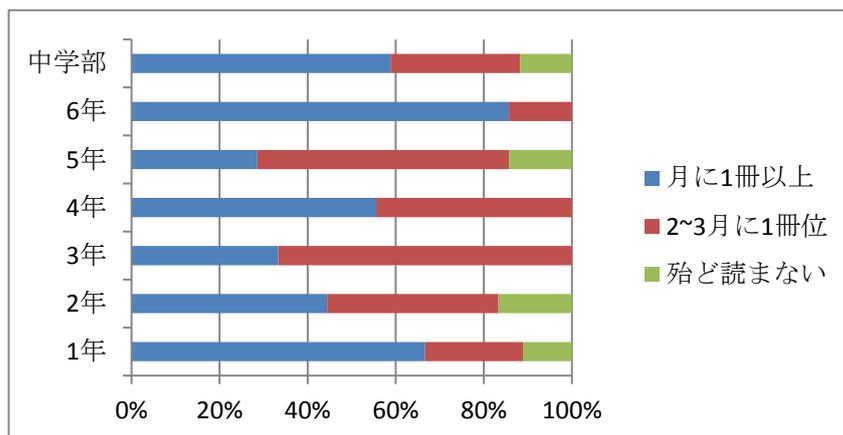
② 中学部

「将来日米の懸け橋になりたい」「将来は国際舞台で活躍したい」という質問に対して、3段階中1・2を付けた生徒が多い。これは、「そんな大それたことはできない」という、生徒の謙虚な気持ちの表れでもあるが、トランスという日本人にとって大変恵まれた環境で中学時代を送っているという自己肯定感の欠如、また、自分の家族が国際舞台で活躍しているという認識が低いという実態を表している。

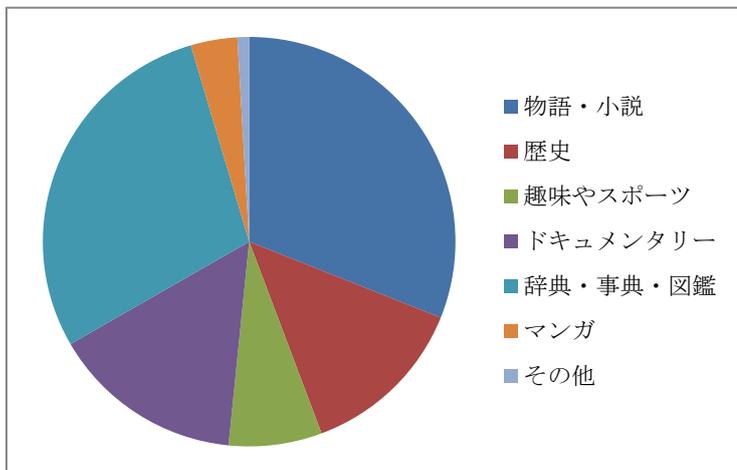
(3) 図書に関するアンケート

図書館を活用した研究を行うにあたり、本校の児童生徒の読書の頻度、よく読む本の種類、言語等の事前調査を行った。

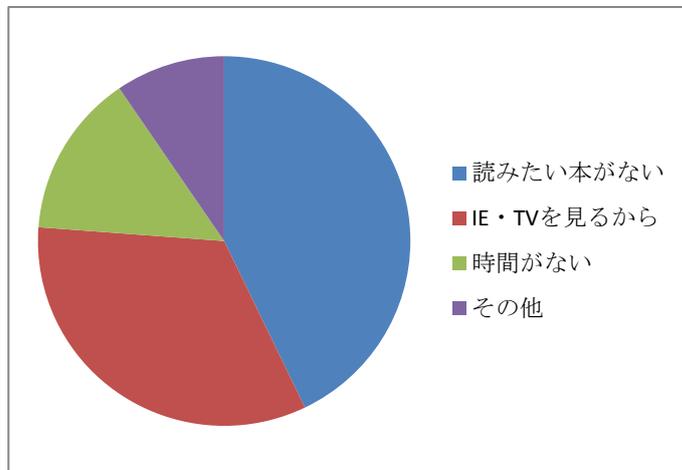
グラフ4：読書の頻度



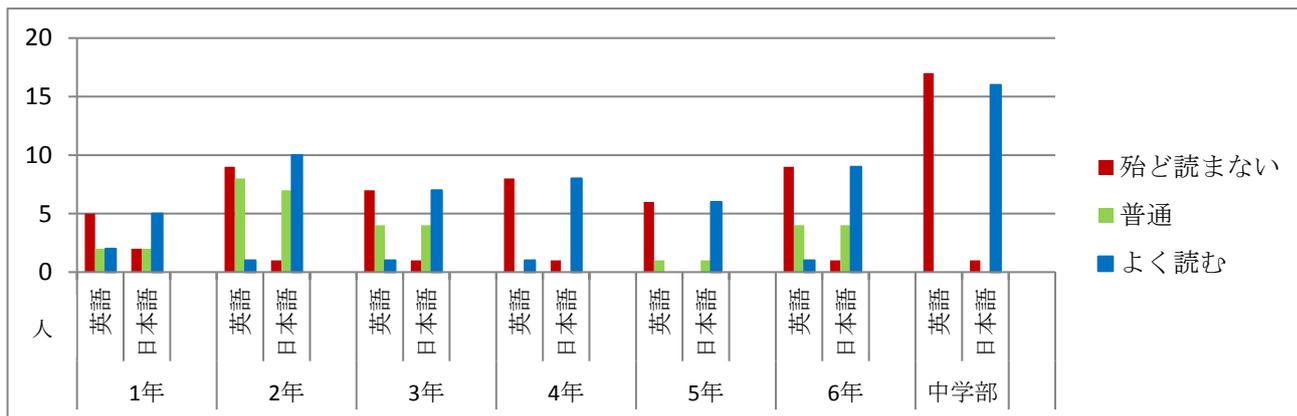
グラフ5：よく読む本の種類



グラフ6：読書しない理由



グラフ6：読書の言語



①総合データの考察

・読書の頻度が全体的に低いのは、図書館整備のため、貸し出し再開が2018年1月になったこと、これまで各自の図書貸し出し数を正確に数値で管理しておらず、児童生徒が読書頻度を把握しにくかったことも一因と考えられる。今後は多様な教育活動を通して、読書が推進されていくよう調査を続ける。

・よく読む本の種類は、物語や歴史が多くなってはいるが、旧図書館の蔵書数が少なく、読み物(物語・小説)が多かったことを考慮すると、決して高いとは言えない。また、本校の地域性から、日本国内のように児童生徒が自分で図書、雑誌、マンガを購入する環境ではなく、必ず保護者と図書を購入する、または、学校図書を読む機会が多くなっている。つまり今回の結果は、実際に児童生徒が読みたいと思う図書の種類というよりは、旧図書館の蔵書の割合に比例した数値である可能性も高い。

・読書しない理由については、読みたい本がない、インターネットやテレビをみるという理由が多いが、読みたい本がないという点については、本研究で改善していくことができる。

・ELD(English Language Development)の上級レベルでは、米国の文芸作品を読んでいるが、初級レベルではPhoenixなどの識字指導から初めて、英文を読む力を育成しており、英語の図書については読書にいたるまでの個人差が大きい。しかしながら、全体として英語の本を読む人が少ないのは、学校活動の中で、どの段階の英語力の児童生徒にも等しく読書の機会を設けていないことが、理由の一つと考えられる。

②学年別データの考察

第3学年：児童数12名に対して、第一言語が日本語の児童が7名、英語の児童が5名

第一言語が日本語の児童の読書頻度：英語 5% 日本語 95% (平均)

・ELDの課題などで英語の本を読む事例が殆どだが、英語学習が好きで、家庭でも積極的に英語学習を行っている児童は英語図書を読む割合が最高20%と高くなっている。

第一言語が英語の児童の読書頻度：英語 64% 日本語 34% (平均)

・国語とELDの指導時間が7:5になっているため、日本語の図書を読む機会は、英語の本を読む機会よりも多い一因と考えられる。この場合も、保護者が日本語学習に積極的な場合は、日本語図書を読む割合が最高60%と高く、ほぼ同じ子女が学齢に即した英語の読み物(物語・小説)を購入して、ネイティブの英語力を保持している場合がみられる。

・一方、学校の課題以外に本を読まない児童は、第一言語が英語でも日本語の図書の割合の方が高い。

読む本の種類と読まない理由

・読書量が多い児童ほど、ファンタジー、伝記、科学読み物など、好きなジャンルがはっきりしている。

・「時間がない」が最多の理由である。本校では英語教育へのニーズに対応するため、2014年度より朝の15分を、短時間活動(文科省,小学校における外国語教育の充実に向けた取り組み,2016年2月)にあて、英検所得級に沿った英語と日本語の単語学習を行っており、このことが読書時間の確保に影響を与えている一因とも考えられる。

(4) 図書貸し出し状況

開館したばかりで図書が不足していること、特に大人向け図書の整備が完了していないこともあり、今期は一般の貸し出しが実現していないが、開館後1か月半で、内部者向けに422冊の図書貸し出しが行われた。また、保

貸出統計

西大和学園カリフォルニア
2018年02月16日

統計期間：1900年01月01日～2018年02月16日

学年	クラス	図書									郷土資料	絵本	紙芝居	小計	雑誌	AV	合計	
		0 K0	1 K1	2 K2	3 K3	4 K4	5 K5	6 K6	7 K7	8 K8								9 K9
1	平日 中学部	0 0	10 0	0	0	0	10	0	0	10								
1	平日 小学部	0 1	0 0	0 0	1 0	2 0	0 0	3 0	2 0	3 0	17 6	0	0	0	35	0	0	35
1	平日 幼稚園	0 0	0	0	0	0	0	0										
1	補習校 IV級中	0 0	0	0	0	0	0	0										
1	補習校 IV級小	0 0	0	0	0	0	0	0										
1	補習校 IV級特	0 0	0	0	0	0	0	0										
1	補習校 III級小	0 1	0 0	0 0	3 0	17 1	0 0	0 0	3 0	1 0	49 6	0	1	0	82	0	0	82
1	補習校 III級特	0 0	0 0	0 0	0 0	1 0	0 0	0 0	1 0	0 0	3 0	0	0	0	5	0	0	5
1	補習校 IV級中	0 0	0	0	0	0	0	0										
1	補習校 IV級小	0 0	0	0	0	0	0	0										
学年計		0 2	0 0	0 0	4 0	20 1	0 0	3 0	6 0	4 0	79 12	0	1	0	132	0	0	132
児童・生徒		5 2	1 0	7 4	10 1	40 8	4 0	3 0	18 0	8 1	222 47	0	2	0	383	0	0	383
教員		0 0	0 0	0 0	0 2	1 0	0 0	0 0	0 0	0 0	29 3	0	1	0	36	0	0	36
その他		0 0	0	0	0	0	0	0										
除籍利用者		0 0	3 0	0	0	0	3	0	0	3								
合計		5 2	1 0	7 4	10 3	41 8	4 0	3 0	18 0	8 1	254 50	0	3	0	422	0	0	422